

和地ひとみレポート No.257

教育評論家 尾木ママを迎えての東大和市養育家庭体験発表会 社会全体で子ども達を育てる意義を再確認



■10月と11月は里親月間

…厚生労働省では、毎年10月を「里親月間」と位置づけ、里親等委託（ファミリーホームへの委託を含む）を推進するための集中的な広報啓発を実施していますが、東京都では11月までを含んだ2カ月間を里親月間とし、都内の各自治体との協力のもと、養育家庭などの子育て体験を聞くことができる「養育家庭体験発表会」を都内各地で開催しています。東大和市でも小平児童相談所と東大和市子ども家庭支援センターの主催により、11月9日（木）の午後、ハミングホールで「養育家庭体験発表会」が開催されました。

■東京都の現状は

…今現在、社会的養護を必要としている子ども達は、日本全国に約45,000人います。そして、東京都には、そのうちの約10%の約4,000人の子ども達がいます。社会的養護とは、『子ども達を家庭にかかわって公的に育てる』ことで、その中には、より家庭に近い環境で子ども達を育てる家庭的養護と、児童養護施設などの施設養護があります。

…この社会的養護を必要としている子ども達とは、戦後の戦災孤児から始まり、その後は実の親のいない子どもが多かったとのことですが、現在は、経済的な理由だけではなく、虐待が原因で親元では暮らせない子ども達が増加している状況です。子ども達は家庭で暮らし、成長することが望ましいのは当然です。そのため、このような子ども達に“家庭”という安全基地を持たせてあげるためにできたのが「養育家庭制度」ですが、東京都では、約4,000人の子ども達の9割の養育家庭がなく、児童養護施設で生活をしている状況。少しでもこの「養育家庭制度」を知ってもらい、普及させるため、今回の「養育家庭体験発表会」は開催されました。

■養育家庭（ほっとファミリー）とは

…会の主催者である小平児童相談所の管轄エリアは小平市・小金井市・東村山市・国分寺市・西東京市・東大和市・清瀬市・東久留米市・武蔵村山市ですが、今現在、小平児童相談所での養育家庭の登録数は46家庭です。そのうちお子さんを預かっていたいただいているのは29家庭なので、待機しているご家庭が多いのではないかと思います。しかし、実際はお子さんのニーズと養育家庭のニーズのマッチングが出来ないためなので、幅広く養育家庭の登録をお願いしたいとのことでした。また、小平児童相談所の最近の傾向としては、中学生、高校生の子どもの養育家庭となる例が増えており、東京都全体としてもこのような高齢児の受け皿となってくれる養育家庭を広く求めている

とのことがありました。その理由としては、高校受験や大学受験など、子ども達の将来について、一対一で相談に乗ってくれる養育家庭の存在の重要性が一層高くなるという背景があるそうです。

…この養育家庭について東京都では「ほっとファミリー」と呼んでいます。この養育家庭とは、養子縁組を目的とせず、色々な事情で家庭では暮らすことができない子どもを一定期間養育してもらおう家庭のことです。（住民票の続柄は縁故者になる）

…登録については、児童相談所に問い合わせをし、申請要件の確認後、認定前研修や様々な手続きを経たのち、児童福祉審議会里親認定部会で審議され、最終的には東京都知事の認定を受けての登録となります。

…実際にお子さんを預かる前には、引き合わせから2か月間の交流を重ね、最終的には委託が開始。委託中の養育費（子どもの生活費等と里親手当）が支払われるほか、児童相談所の定期的な家庭訪問などのバックアップもあります。また、子どもの委託は2年ごとに見直し、子どもの養育上、必要に応じて更新され、措置解除（＝委託の終了）については、児童福祉法上の18歳（場合によっては20歳）に達した際の「満年齢解除」のほか「家庭引き取り」等の理由で行われます。

■重要な自己肯定感…元里子さんの体験談

…会では、養育家庭制度の説明後、元里子（養育家庭で暮らした子）の遠藤さんという20代の女性が体験談を発表されました。そのお話は良い事ばかりではなく、様々な体験や思いをまっすぐに伝えるものでした。本当の母親は「お母さん」で、施設で一番面倒をみてくれた先生は「ママ」だったのに、なぜ、養育家庭に行かなくてはいけないのか理解できなかったこと。養育家庭では最初のうちは、必要最低限しか話さなかったことなども素直に話してくれました。しかし、高校受験の時、親身になってくれたことを機に養育家庭の「里親さん」に心を開き始め、大学進学を迷っていた時も、様々な奨学金制度の資料を「里親さん」が集めてくれたことで、大学も卒業でき、現在は看護師として奨学金の返済もできており、感謝しているとのことでした。何より、里親さんとのことで、自己肯定感を持つことができたことが良かったと、ずっと淡々と冷静に語られていた遠藤さんが、涙で声を詰まらせていた姿には、会場にいた全員が社会的養護の重要性を改めて感じたように思いました。そして、最後に遠藤さんは「社会人になって、里親さんの大変さが分かった。子どもへの愛情やパワーは、本当にすごいと尊敬している。子どもを育てることは自分の子どもでも大変だと思う。（裏面に続く）

しかし、少しでも多くの人にこの制度を知ってもらいたくて、今回は、体験談を語らせて頂こうと思った。少しでもこの制度に興味を持ってもらえたら嬉しい。」という言葉で体験談を締めくくりました。

■尾木ママの講演

…また、今回の「養育家庭体験発表会」では、テレビでもおなじみの教育評論家“尾木ママ”こと尾木直樹氏が『尾木ママ流共感・子育て～家庭的養護を考える～』というテーマで講演されました。1時間という時間を予定していましたが、最終的には時間を15分以上超えての熱のこもった講演となり、その内容はとても充実したものでした。

…講演の最初に語られたのは『自己肯定感』について。講演に先立って遠藤さんが『自己肯定感』について語ったことを取り上げて、その重要性を説明されました。講演では様々なことが語られたので、すべてをここでお伝えすることはできませんが、印象に残ったポイントは以下の通りです。

「養子縁組や里親制度なども少しずつ広まって、頑張っているが、すべての子どもが幸せにならないとダメ。日本はすぐに“その親が悪い”“その家庭が悪い”と個別の責任にさせられる。こういうのは日本ぐらいだ。社会全体で養護するというのは日本の最大のテーマだと言っても良い。」

「NHKがこの1年間10の番組で発達障害の特集を組んでやっている。こんなのは初めての取り組みだ。なぜ、そんなに一生懸命やるのか？発達障害は人数的には6.5%と少ない。しかし、発達障害というのは、骨折とは違う。骨折は『する』『しない』とはっきりしているが、発達障害については、その強弱しかない。医師によっては判断の物差しを持っているが、それもはっきりしていない。発達障害でない人も、どこかの部分でそういう要素を10%なり20%なり、みんな、持っている。つまり、全員の問題ということを知らせたいのだ。」

「弱者や少数派の人について『かわいそうな、気の毒な人の話を聞く』とか『そういう人を応援する』ということではない。だからNHKも様々な番組で取り上げるようになった。みんなの問題として考えて、弱者の人に自己肯定感を持ってもらうことが必要。自己肯定感が高まれば、積極的に様々なことにチャレンジでき、それが多くの問題を解決する。すなわち、弱者だけではなく社会全体の、みんなの幸せにつながる。」

「1997年から日本の教育は決定的に変わった。それは、脳科学が発達したからだ。よく『厳しい子育て』と『怒らない子育て』はどっちが良いかという議論があり、以前は両論あったが、それについても脳科学で証明された。人間は『怖い』と思った瞬間に脳の海馬が数%委縮する。しかし、子どもが失敗した時に『どうしたの？大丈夫？』とリラックスさせてあげると海馬が7~9%大きくなるということが脳科学で証明された。やさし

いリラックスした母親、学校の先生のもとで、子ども達が育つことが、どれだけ大切かということが科学的に証明された。」

■一つだけ、残念なこと…

…尾木ママの講演では、上記以外にも、子育てに関すること、教育に関することが、様々な研究結果を背景として紹介されました。会場には、保育スペースもあったため、乳幼児連れのお母さんたちも来ていましたが、皆さん、子育てのヒントをたくさん聞け、満足している様子でした。

…このような講演会は、子育て中の人だけでなく、幼稚園や保育園、学童保育所、学校の先生、PTA関係者など、子どもに関わる多くの人に聞いてほしいと思いました。しかし、当日の会場は200名定員のところ半分程度しか席が埋まっていない状況。講演者の尾木ママも、この状況に驚き「昨日の新潟市の講演会では800人の会場に立ち見が出たし、横浜のパシフィコ横浜では2400人の会場でも立ち見があったのに…今日の東大和市は、どうしたのかしら？」と何度かおっしゃっていました。

…尾木ママの講演を聞きたいと探せば、どこかでその機会は得られますが、地元、東大和市で開催されるという機会はめったにありません。そういう良い機会を最大限に活用いただくためにも、市はもっと広報すべきだったと思います。今回の会の主要テーマは「養育家庭制度の普及」ですが、講演者が教育評論家ということ、また、『社会全体で子ども達を育てる』という大きなテーマを考えれば、広報すべき関係団体などももっとあったはずです。

…『日本一子育てしやすいまち』を目指す東大和市として、子どもや子育てに関連した取り組みに力を入れているということは、最近、様々な場面で感じますが、それが市民に届かなければ、もったいない。養育家庭にはなれないという市民でも、社会全体で子ども達を育てる重要性を知ることは、東大和市の子育て環境の充実、向上につながります。市には、今回の反省点を今後の取り組みに活かしてほしいと思いました。

【東大和市議会“市民の声を聴く会”開催のお知らせ】

昨年まで計4回開催した「議会報告会」について、東大和市議会では、参加者の皆様のアンケート結果をもとに、内容の見直しを検討してきました。そして、今回は「より広く、市民の皆様のご意見、ご要望を聴く会」を開催することを決定。11月15日には、市内の駅頭での広報活動を行います。（私は上北台駅担当）

お時間がございましたら、是非、ご参加ください。

◇日時：11月25日（土）午後2時～

◇場所：東大和市役所会議棟 第6会議室

市政、議会について「自然体」「ざっくばらん」にレポート。駅前配布するレポートは毎回、最新号です。

「私たちの身近にある市政、市議会。伝えることがスタートだと思います。」 【プロフィール】



東大和市 市議会議員
和地 ひとみ

1970年 東京都北区生まれ。父の転勤で1歳から群馬県で育つ。幼稚園からカギっ子。リーダーシップを発揮し、小学校で児童会長、中学校でも生徒会長を務める。大好きな音楽を究めようと武蔵野音楽大学に進学、卒業。卒業後は群馬の山あいの小学校で臨時教諭として担任を2年勤め、新しい試みで授業を活性化させ「元気印の先生」として保護者・生徒から親しまれた。『学校』の外の一般社会で挑戦しようとベンチャー企業の(株)シートゥーネットワーク（※スーパーマーケットを経営。店頭公開から一部上場、外資系企業に転換）に社長秘書として入社。のち店舗現場に異動、同社で初の女性店長となる。月刊誌『日経WOMAN』のベンチャー企業で活躍する女性特集で取り上げられる。その後、人材開発部長を拝命。『人を活かす』経営を学ぶため一念発起しカナダに留学。外から見た日本の将来に、漠然とした不安を感じる。帰国後は、不動産投資会社にて企画業務、税理士対応、広報、社員研修、組織活性化などに従事。2011年4月、初当選。現在2期目。顔の見える議員として、日々奮闘中。

■ 連絡先 和地 ひとみ事務所 HP : <http://www.wachi1103.jp>

✉ wachi_hitomi@cocoa.ocn.ne.jp 【電話・FAX】 042-516-8546

〒207-0005 東大和市高木3-274-2-102